

障害と私

井本 健

この原稿を書いている2006年6月、ワールド・カップ・サッカーがドイツで華やかに開催されている。思えば、前回の日韓共同開催のときは、私は市立病院のベッドの上で、不安と焦りの中で、テレビにかじりついてみていたのだった。

青天の霹靂ともいふべき、突然の脳梗塞に倒れて、点滴治療の真っ最中だった。

リハビリのため七沢の病院に転院した。

この病気は故障が起こった部位と大きさにより、後遺症の重さはさまざまである。

そして、発症の年齢とそのときの家族環境により、いろいろの対処の仕方があるのである。

私の発症からの4年の歳月を綴ってみたい。

青春時代へとはいわないが、せめて、病前までに戻してほしい、といっても、それはできないこと。人生はやり直すことは出来ない。

どんなに重い障害を背負っても、続きの人生を送らなくてはならない。だから、病気を受容して、それぞれの後遺症を前提として、その後の人生を、生きていかなければならない。

中途障害者は過去に、普通の生活があっただけに、この環境の変化に対応することが難しい。

しかし、続きの人生を送っていかねばならないのだから、障害を受容すること、障害に上手に慣れること、そして、究極的には自分自身が変わることでは、解決しないのである。

「62歳で発症、左片マヒ2級」の私の実例で述べてみたい。

見た目は普通に近いが、左手の機能は全廃。

左手が全く使えないのである。

平たく言えば、茶碗が持てない、紐が結べない。左足は何とか杖をたよりに歩ける程度。

しかし、幸いなことに、右手足は正常、視聴覚、言語、判断など外の機能は全て正常である。

従って手足は思うように動かなくても、続きの人生を送っていくことは、制約はあるが、できない相談ではない、と思うようになった。

病気を運命と諦め、後遺症の大きさと年齢により、これからの人生をしっかりと受け止め、今後は新しいステージ上でやっていくしかないのである。人生の目標をスローガンにしてみるとわかりやすい。もちろん、スローガン通りに生きていけるわけではないのだが、とにかく、プラス思考で生きようと思い始めた。

各年毎のスローガンは次のようなものである。

○平成14年(2002)62歳

発症→入院・退院。

心身ともに暗中模索時代。「何だ、これから、どうしよう、落ち着け！」

○平成15年(2003)63歳

体のリハビリ→歩けるようになろう。

「リハウス」※注1→バリアフリーの実現。

「現実を直視しよう」

○平成16年(2004)64歳

日常生活のスケジュール化→心のリハビリも。

「おまけの人生、スローライフを愉しもう」

○平成17年(2005)65歳

プライドと進化→残りの人生での目標設定



と、それを深耕するための、日常のスケジュール化。※注2

「悠々として急げ」開高健の言葉。

○平成18年(2006)66歳

体と心のリハビリ→パワーリハビリ※注3の導入(介護保険の改正)。

「地道にシンプルに暮らそう」

<注※>

注1 リハウスとは、一戸建て二階家からマンションに住居を移したこと。

注2 日常のスケジュール化とは、学校の時間表のように、月曜日から日曜日に、行く所、やること、を決めたこと。(パワーリハビリ、囲碁、図書館、随筆の会、スポーツ教室、読書会、は定期的に、ほかに、身障者福祉協会の諸会合、バス旅行、同窓会、ジャズライブ、などは随時)

注3 パワーリハビリとは、ショートステイやデイサービスのように、風呂や食事があるのではなく、機能回復維持のための体操だけをするデイサービス。

この4年の間に環境も変わった。後遺症も最悪の事態は免れた。

発症したのが62歳であったので、再就職は必死ではなかったし、また、実現できなかったのが、年金生活に甘んじた。

発症後、上の娘に二人の孫ができた。下の娘が社会人になった。リハウスして、海辺のマンションに引っ越した。

私自身も障害者として、孤独に生きていくよりも、社会との繋がりをもっていくことが大切であると思い、退院の翌年、「片マヒ自立研究会」に参加した。

この会合で、貴重な体験談を聞き、体験者自身が書かれた貴重な書物も多数読んだ。

大いに感謝している。

今年は、この会で得たものを生かして、地域の障害者福祉協会活動に専念して、地元に着した活動をすることにした。

また、これからの高齢化社会では、市の生涯学習教室で、仲間とともに、地元ゆかりの文学や歴史を学ぶのも、これまた、楽しいことに気付いた。

昨年11月には、障害者の憲法ともいうべき「障害者自立支援法」が成立した。

介護保険制度の大幅な見直しも行われた。

福祉はお金だけで解決できるものではないことは、いうまでもないが、真の福祉とは何か。

人の心に深く関わった生きる権利・義務について考えながら、残された人生を肉体的ハンディを負いながらも、有意義に送ろうと思っている。

最近、曾野綾子の『晩年の美学を求めて』という本に、感銘を受けた。

私達は、障害に加えて、加齢の問題がある。

高齢化社会で、生き生きとした幸福を見つけるヒントがこの本の帯や目次を見ただけでもわかる。

「他人の好意にすぎりすぎないこと」

「孤独と上手に付き合うこと」

「分相応を知ること」

(人が…をして)「くれない族になるな」等々

含蓄のある文章がたくさん出ているので、これらを参考にして、生きていきたい。



戻る